

破綻寸前の首都圏医療

首都圏の医療拠点と位置づけられる私立医科大学や私立大医学部の附属病院が経営の危機に瀕している。もともと人件費が地方よりも高い構造的な問題に加え、昨年四月に五%から八%に引き上げられた消費増税が火に油を注いだ。医療機関は薬や医療機器を購入する際に消費税を負担する一方、診療報酬は非課税で患者や保険組合

に請求できない。それゆえ、消費税分は持ち出しとなってしまいうか。ところが厚生労働省や日本医師会は問題を把握しながらも、見て見ぬふり。ただでさえ救急患者や妊婦のたらい回しが問題視されているにもかかわらず、この現状を放置したままでは首都圏の医療体制そのものが崩壊しかねないのだ。

四十代外科医で月収四十万円以下

存亡の瀬戸際に立たされている筆頭は、東京・文京区の日本医科大学(日医)。脳卒中や交通事故など救急患者を治療する医療機関の中核だ。日本最古の私立医大で、間もなく開学百四十年を迎える。日医が公表した財務資料を読むと、その惨状は目を覆わんばかりだ。平成二十五年度は二十九億円、二十六年度は百五十八億円の赤字総資本を自己資本で割った財務レ

バレッジは三四九%と借金が自己資本を大幅に上回る。流動比率(流動資産と流動負債の比)は七〇%と手元資金も心許なく、関係者は「倒産寸前」と口をそろえる。なぜ、名門医大はこんな状況に陥ったのか。蹶きのきっかけは、一九九四年の千葉北総病院開設にさかのぼる。バブル末期に米国を真似て医療学園都市を造ろうと、土地を買い漁った。だがバブルが

はじけて、ゴーストタウンと化す。大赤字を垂れ流し、メインバンクのみずほ銀行の監督下に置かれる羽目になった。東京・飯田橋の第一病院、神奈川県川崎市の用地を売却し、学費を大幅に値上げした。この荒療治によって、一時的に経営状態は改善したものの、しょせんは焼け石に水だった。最近では老朽化した本院建て替えのために借り入れを増やさざるを得なくなった。これで日医の有利負債は一五年三月現在、約六百億円まで膨らみ、年間の利払いが七・三億円に達している。ただ、いくら借金が膨らんでも、病院経営が安定していれば問題ない。ところが、消費増税による負担を診療報酬に転嫁できないことが駄目押しとなり、肝心の経営を直撃したのだから手の打ちようがない。

当然のことながら、所管の厚労省も事態を承知している。増税対策として、一四年度の診療報酬改定で、診療報酬本体を〇・六三%増額した。それでも、この程度では三%の税率引き上げであいた大きな穴を埋めることなどできない。例えば、消費税が三%上がった平成二十六年度の日医の医療経費は約二百三十七億円。前年度より二・六億円増えた。さらに施設管理費として約百五十一億円かかっている。新病院建設中のため、前年度と単純比較はできないが、これも損税の影響をうける。そこへ持ってきて、一七年四月に消費税率が一〇%に上がるのだから、たまったものではない。

名門の日医にして、この有り様なのだから、他の私大附属病院の惨状も推して知るべし。民主党政権時代に診療報酬を手厚くしたのもつかの間、自民党が政権に復帰して、従来の開業医重視に時計の針を戻した。これも私大病院の経

営悪化に拍車を掛けた。

厚労省は対策を検討しているというが、実態は無策だ。ある厚労官僚は「損税を補填すれば、税収が減る。どこかの病院が倒産してメディアが大騒ぎするまで、財務省にそんなことは言えない」という。

現在、東京、神奈川、千葉、埼玉の首都圏に十五の私大医学部があり、それぞれ附属病院を併設する。国公立大の病院も含めると二十で私大附属病院の割合が高く、首都圏医療の中核を担ってきた。私立のうち、日本大、慶應大、帝京大、東海大の四つの総合大学を除く十一の医大について財務状況を分析してみると、深刻な内実が浮かび上がってくる。

実は、消費増税の前から首都圏

の私立大の附属病院は苦戦を余儀なくされてきた。最大の理由は、診療報酬が全国一律の公定価格だからだ。地価や物価、人件費が高い首都圏では自ずと利幅が薄くならざるを得ない。岩手医大や金沢医大などの地方医大の附属病院が九%以上の経常利益を計上しているのとは対照的に恒常的な赤字体質の病院が目立つ。そこに消費増税が追い打ちをかけたことで、私大附属病院の困窮はもはや覆い隠せない状況になってきたわけだ。

公表データによれば、日医、北里大学、聖マリアンナ医科大学の附属病院は赤字経営だ。黒字の病院も利幅は極めて小さい。経常利益率は東京女子医大(女子医)一・四%、杏林大二・八%など、首の皮一枚で黒字という危うい数字が

並ぶ。

この綱渡りの余波は、医療の現場に波及している。例えば、もともと経営状態が良い順天堂大学付属病院の四十代の外科医でさえ「手取りの月収は四十万円に届かない」と打ち明ける。高給取りという世間のイメージとは裏腹に、首都圏の私立大附属病院の勤務医

患者は二の次で不正や事故が横行

こんな金んだ状態がいつまでも続くわけがない。ツケを払わされるのは、他でもない患者だ。医師が外勤のアルバイトに精を出せば、普段受け持つ患者の治療は二の次にならざるを得なくなるからだ。揚げ句の果てには、不正に手を染める不届き者さえ出てくる始末。それは女子医で顕在化した。

はギリギリの生活を強いられている。そのため医師の大半は、本業そっちのけで外勤のアルバイトに勤しむ。別の私大附属病院に勤める内科医は「平日に一日外勤して、毎週二回は当直勤務。体が持ちません……」と漏らす。いまや、首都圏の私立大附属病院はブラック企業と言っても過言ではない。

平成二十四年、交通事故に遭った三十二歳の女医は、叔父の経営する接骨院に一回しか行っていない。それにもかかわらず、年間二百二十九日も通ったと偽って保険会社から約二百六十五万円を騙し取ったとして、詐欺罪で捕まった。

また女子医で昨年に起きた幼児